

1. おじさんとの再会

今年の冬休みは思わぬことが起きた。

俺は1月1日に帰省する予定で、チケットを買っていた。年末年始は新幹線が混む。元旦だとむしろ移動は少ないからその方がいいと思っていた。年末はギリギリまで授業もあったので、そうそう早くは帰れないし、1日に帰って5日に京都に戻ってくるという計画だった。

本当はあまり帰りたくない。何度も書いている通り、俺は故郷が嫌いなのである。とは言っても、母ももうすぐ85歳。いつ何時何が起きるかわからない。これまで散々苦勞をかけてきたので、たまには帰ることが親孝行だろうと思って、ここ数年は1年に2回くらいは帰るように心がけていた。

帰る2日ほど前である。弟のFBを読んでいると、母と一緒に墓参りに行ったら、ずっと音信不通だったおじさんと偶然、再開したという記事が出ていた。ドキッ!

このおじさん、母の兄にあたるのだが、25年前、父が亡くなったときの葬式以来会っていない。その後、このおじさん、母や他の妹たちとも縁切り状態で、連絡が途絶えていた。別に妹たちと喧嘩したわけでもないのだが、何か気まずいことでもあったのだろうか。父が死んだ翌年、俺の弟が亡くなったのだが、その葬式にすら来なかった。その数年後、お婆さんの夫が亡くなったことは知らないだろう。

おじさんは元々自由人で趣味人である。商業高校を卒業すると、趣味のお茶用品のお店に就職した。長らく独身だったのだが、中年になってから、自分よりも一回り以上年上の、バツイチで、子連れの女性と結婚し、しかも、周りには内緒でその女性の籍に養子に入ってしまった。きょうだい男は1人なので、伝統的な考え方でいけば家を継ぐ使命もあったのだろうが、そんなことにとらわれる人ではない。

実は俺は子供の頃からこのおじさんに似ていると言われていた。頭でっかちで、スポーツが全然



男は 痛い



國友万裕

第46回

『ある男』

できず、子供の頃は病気だと偽って、体育の授業に参加していなかった。話し方もお姉言葉になるので、ゲイなのかと思われることもある。

しかも、芸術好きで、絵を描くことが好きで、世間の常識にとらわれるのは嫌いな人だ。まさに俺はこの人の DNA を受け継いでいるのだ。と言っても、おじさんのほうが俺よりも遥かにイケメンである。母やおばさんたちは美人ではないのだが、おじさんは色白で目鼻立ちも整っている。

俺が生まれたばかりの頃は、このおじさん、俺のことを相当可愛がっていたみたいだ。俺を産んだ後、しばらく母が体が悪くて、退院できなかったため、その間はおじさんが俺の面倒を見ていたとのことである。俺はよく泣く子で、ミルクとかも甲斐甲斐しく作ってくれていたらしい。

このおじさん、自由人で常識にとらわれるのが嫌いな人だったが、誰にも迷惑をかけることはない人だった。また俺が不登校になって、白眼視されていた頃も、このおじさんだけは何も気にしていなかった。

「学校に行かないからって、人様に迷惑をかけるわけでもないわけだから」というのがおじさんの理屈だった。

しかし、俺は思春期になるとこのおじさんにも反抗し始めた。俺にとっては 10 代の頃は社会全体が俺の敵だったのだ。

その後、徐々に京都が本拠地になって行って、おじさんとは会うことも無くなって行った。

母たちは、たまに法事などで姿を見ていたらしいのだが、何があったからなのか。おじさんは忽然と姿を消したのだ。88 歳だから、もう男の平均寿命よりもはるかに年取っている。もうどこかで亡くなっているのかと思っていた。母やおばさんたちも連絡しようがないし、いつのまにか全く縁が切れてしまっていた。

それが突然忘れた頃にお墓で母や弟と再会。しかも、その後、早速、俺の実家に泊まりにくるようになってしまったのだった。

奥さんは、ずっと年上の人だったからもう何年

か前に亡くなっただろう。子供や孫もいるのだが、奥さんの連れ子だからおじさんとは血縁関係はない。だからそうそう我儘も言えないだろうし、久しぶりに母と会って、妹に頼ろうかという気持ちになったのだろう。

「もうあの人も、昔とは違って大人しくなっているから。別に気にしなくていいから」と母は電話口で言った。

俺はちょっと重い気持ちを抱えながら、実家へと向かった。おじさんはすっかり歳をとって頭は禿げ、足が悪くて透析に通っているらしく、トイレまでいくのも難儀そうである。母と会った翌日にタクシーで、母のところにパジャマのままやってきたのだそうだ。

ちなみに母は 4 人きょうだいで、おじさん、母、そして 2 人の妹がいる。

上のおばさんは、サラリーマンに嫁いで、その後、あちこち転勤した末、埼玉にマンションを購入して暮らしている。元々都会好きの人で、土の香りがしない人だ。昔から自分が東京圏で暮らしていることを鼻にかけるような人だった。「私は六本木ヒルズのところを通って仕事に通うのよ」などと自慢していた。六本木ヒルズのところを通るなんて誰でもできることなのに。

下のおばさんは、波瀾万丈な人生を歩んだ人で、できちゃった婚の走りである。今はできちゃった婚なんていくらでもいるが、50 年以上前だから、周りは腰を抜かすような一大事だったらしい。その後おばさんは離婚し、息子はあちこちをたらい回しにされて、結局心を病んでしまい、もう 50 歳を過ぎているはずだが、30 年ぐらい福祉のお世話になって暮らしている。今は社会福祉が行き届いているから衣食住は大丈夫であるにしても、30 年も 1 人で何もせずに暮らしていくというのはどういふものなのだろうか。

離婚後、このおばさんは、また新たな男性と再婚し、その人との間に娘をもうけた。2 度目の旦那はだいぶ年上だったので早くに亡くなり、その後、おばさんの娘は未婚のまま母親になった。彼女の

場合は最初から結婚してもらい気もなく、確信犯的シングルマザーである。まだ 25 歳で、子供を産むのに焦る歳でもないのに、どうしても子供が欲しいと出産ノイローゼになっていたと聞いていた。

シングルマザーといえど、芯の強い女性を想像する人が多いだろうが、彼女は心も体も決して強い女性ではない。おばさんがいたから公団住宅でどうにか息子を育ててきたが、もし、おばさんが倒れでもしたら、俺の母に頼ってきていただろう。相手の男性も災難だ。最初から結婚する気もなく、種だけ提供して、まだ今のところ、なんの迷惑もかかっていないはずだが、万が一、幸せな家庭を築いているときに、「この子、あんたの子よ、なんとかしてよ」と言ってこられたりしたら、男の方はたまったものではないだろう。

その息子が高校 2 年になって不登校になり、2 年で中退して、通信の高校に移った。俺と全く似たような人生を歩んでいる。

とはいうものの、不登校も昔と今では変わった。彼が出席不足で、進級できなくて、学校を辞めることになったとき、友達が家に泊まりに来たのだそうだ。学校の先生たちもみんな親切で、彼をどうにかしてあげようと至れり尽くせりしてくれたらしい。だから、彼は先生たちに感謝していて、この後大学に入って、学校の先生になろうと思っているみたいだ。今は予備校生なのである。

かくいう俺もいまは学校の先生だが、俺は成り行きで先生になっただけのことで、学校の先生にだけはなりたくないはずと思っていたのだった。

家に帰ってみると、母が言っていた通り、おじさんは大人しくなっていた。リビングを自分の部屋みたいにしていて、お風呂も勝手に入ってしまう。しかも、リビングで服を脱ぎ捨てて、恥ずかしがってもいない様子を見て、歳をとったら、俺もこうなっていくのかと悲しくなったものだった。

かつては、いくら妹の家とはいえ、リビングでパンツ一枚になるなんて絶対にするような人じゃなかったのだ。むしろ、そういう行儀の悪いことは大嫌いで、常に身だしなみもきちっとしていな

ければ気が済まない人だった。そういう人であっても、歳をとると子供がえりしていくのだ。もうそこまで頭や体が回らなくなっているのだった。

母に言わせれば、おじさんは、透析していて足は悪くなっているが、まだまだ頭はボケていなくて、お金は持っているから、タクシーで美味しいものを食べに行ったり、自分の描いた絵の個展を開いたりしているとのことである。

おじさんは 1 月 1 日に帰る予定だったのが、結局もう一泊することになってしまった。正月早々、リビングに居座っていられたんじゃ、俺や弟は迷惑である。しかし、それも気にかけている様子じゃない。

俺もいずれはこうなるのだろうか。『モリー先生の火曜日』によれば、人間は死期が迫って骨と皮みたいになってくると、体は単なる容器で魂だけが自分の存在になるので、死ぬことも怖く無くなるとのことである。まさにおじさんはそういう状況なのだ。もう身体はどう見られてもいい。魂だけで生きているのである。あとは体が終わるときに魂が抜けていくだけのこと。もう何も怖いものなんてないのだ。

2. 男はつらいよ

マッサージの友人は、お店にお客さんが来ないので、この頃夜間のバイトに通っている。宅配業者のやつなのだが、ミネラルウォーターとかお米とかを送ってくる人が結構いるみたいで、重労働のようである。体には自信のある人なのだが、それにしても痛々しい。ある夜は、バイトの直前にマッサージに来てくれて、眠そうな顔をしていた。「この後、朝まで仕事なんです」と話していた。

「子供の顔を思い浮かべて頑張るしかないよね」と俺は言った。

「本当にそうですね」と彼。

そういえば、彼につく前に通っていた、鍼灸の先生も、店にお客さんが来ないから、寿司屋のバイトに行っているとおっしゃっていた。この人も

子煩悩な人で、奥さんが東京の人で、東京に行きたいと言い出して、仕方がないからついていった。

「嫁がパートに出てくれれば、店を閉めることはしなくてすんだんだけど」ともおっしゃっていた。彼のほうは直前まで「僕が京都を離れるなんてことは絶対にはないですよ」と言っていたのだが、奥さんの方は京都の水が合わなかったらしい。奥さんだけだったら離婚してもいいけど、娘と引き離されるのだけはつらいと悩まれていた。

それで東京に行くしかなくなったのである。奥さんは性格が激しくて、喧嘩ばかりしているみたいだったが、自分に収入がないとなると男は妻に頭が上がらなくなる。本当に「男はつらいよ」である。

彼らの姿を見ていると、収入のない夫、働くお父さんは本当に痛いと思う。しかし、2人とも子供がいるから、つらくても頑張れるみたいだった。

俺は子供をつくらなかった。そもそも女性恐怖症で恋愛することができないし、できたとしても、俺の子供なんて可哀想でつくれない。俺は少年時代、毎日が生き地獄だった。そういう悲しい思いをする子を作る気にはなれないのだった。

アメリカでは今は#MeToo運動の名残りののだろうか、かつてセクハラされたと摘発する俳優が増えている。『ロミオとジュリエット』のオリビア・ハッセーとレナルド・ホワイティングが最近になって、映画会社を訴えたと聞いている。彼らが幼少期の頃に、騙されて性的シーンを演じさせられたとのことである。『ロミオとジュリエット』といえば、フランコ・ゼフィレリ監督の名作だが、その裏にはこういうストーリーが隠されていたのだ。

こうやって考えてみると、まさしく俺が小学校や中学校の頃、俺が受けていたのはセクハラ、パワハラ教育なのだ。その当時、先生に反抗しなかった子供達が悪いのだとは言えない。たとえば中学生の子と性的関係をもってしまったら、仮に同意があったとしても同意とはみなされない。まだ小学生や中学生となったら、物事の善悪がわからない。先生たちにコントロールされれば、したが

ってしまうだろう。

一方で、俺はどうしてもそれに従えなかった。その結果、心が壊れ、その後、孤独で長い辛い人生が待っていた。あの当時の先生たちは、今だったらパワハラ、セクハラ、暴力で懲戒免職になっていたとしても、仕方がないような先生ばかりだったのだ。しかし、あの当時は、社会がそれを認めるほど成熟していなかったのである。今頃になって、俺が訴えても、彼らを有罪にすることなんてできないだろう。

このやりきれなさ、いかにして晴らすべきなのだろうか。

3. あと1年で還暦

この頃わけもなくブルーである。

この原稿がアップされる頃には俺は59歳になっている。いよいよ還暦まで1年。そのことを話すと、大抵の人は「60代なんて今はまだ若いから、人生これからですよ」と言ってくれる。だけど、本当にそうなのか。

確かに俺の母は60過ぎてから人生が開けた。思いもかけない方向に開けた。一方で父は65歳で死に、義理のおじさんも68で死んだ。

父の場合は自業自得である。もともと若い頃から糖尿で、医者から節制しろと再三再四言われながらしなかったわけだから、むしろ65まで生きてこられたのが奇跡。父の死の時は周りの親戚も大して悲しんではいなかった。ついに来たるべき時が来たという感じだったのだ。おじの場合は、スモーカーで酒飲みだった。もう少し早くに病院に行っていたら、死ぬことはなかったはずなのだが、それをしなかったと聞いている。

今は確かに人生100年時代で、新聞の死亡欄を見ていると90過ぎてから亡くなる人が極めて多いことに驚かされる。しかし、その一方で死ぬ人も確実にいるのだ。毎日、芸能人や文化人の訃報が流れる。渡辺徹は62、プロ野球選手の門田博光は74、YMOの高橋幸宏は70で亡くなった。80

代、90代まで生きるのが普通の時代になっているとはいえ、歳をとると確実に死ぬ確率はあがっていく。先日もかつてお知り合いだった先生が55歳の若さで亡くなった。

残された人生で何ができるのかということを考えると、それはそれで虚しい。これから待っているのは老いである。そのなかで俺は何をして生きていくのだろうか。

弟はこの頃、一人暮らしを始めた。五十路を過ぎたので、少しは好きなことをして生きていきたいのだけど、弟は「何が好きなかがわからない」と言って悩んでいる。

「何が好きかわからない」という弟の悩みに俺はちょっとショックを受けた。俺は好きなことだけして生きてきたので、「嫌なことはしたくない」「こだわりの合わないことはしたくない」で悩み続ける人生だった。ところが、弟はこれまで現実的に定められたルートの上を歩いてきているので、何が好きなのか、何をしたいのかがわからないというのだ。

俺が弟に苦勞をかけたせいなのだという忸怩たる思いもある。不肖の兄だったので、弟は現実的に我慢強く生きるしかなかったのかもしれないのだ。

でも弟は俺と歳が離れていて、まだ50になったばかりだ。俺はもうすぐ60歳。死に対する恐怖は最近になって小康状態だが、60歳近くになると本当に死が間近にきていると感じることがある。時々息が苦しくなって、体調が悪くなって、このまま死ぬのかと思う時があるのだ。

この頃はむしろこれだけ自分が長く生きてきたことに対して感慨を覚え、もうこれ以上生きても何があるのかという気持ちにもなる。しかし、死ぬのも怖い。これから平均寿命まで生きるとしたら、まだ20年以上はある。その間、この死への不安と闘いながら生きていくのか。残る人生で何か生産的なことができるのだろうか。

ただ、自分ながら成長したと思うのは人の不幸を喜ばなくなったことだ。ある同僚だった先生は、

基礎疾患があつたらしく、ワクチンを受けることができないため仕事をやめて田舎に帰られた。去年まではオンラインでなんとかこなさっていたのだが、もう続けられないと判断されたみたいだ。ある女の先生はまだお若いのだが、癌で大変な状況らしい。以前から親しかった先生も、俺より5つくらい年下のはずだが、非常勤をやめて田舎に帰って家業を継がれるという噂を聞いている。

昔だったら、こういう話を聞くと、俺の方が自分の道で生き延びている、幸せだと自分の幸せに優越感をもっていただろう。今でもそういう不遜な気持ちが全然ないとは言えないが、若い頃に比べれば相当マンになった。

人の不幸を祈ったところで、何も得るものなんてないのだ。人間なんてみんな死ぬんだから、人の人生なんて、宇宙の歴史に比べれば、本当に儂いんだから、みんな一緒なのである。

映画もこの頃、昔ほど夢中にはなっていない。むしろ、この年まで映画一筋で生きてきた自分がなんとなく恥ずかしい気もする。今度、カズオ・イシグロが脚本を書いた『生きる Living』という映画が公開になるが、これは黒澤明監督の名作『生きる』のリメイクである。この映画では、主人公が「命短し恋せや乙女」と自分の人生の虚しさを振り返るブランコの場面が感動ものである。

人間なんてみんな死ぬんだし、人生なんて儂い。人間は結局、何をしても虚しいのだ。

4. 『ある男』(石川慶監督・2022)

春休み中の悩みは時間をもてあましてしまうことである。普段は仕事で極めて忙しいのだが、暇になったら何もすることがなくて、悩んでしまう。俺はいつの間にか仕事人間になってしまっている。

この頃少し時間のゆとりがでてきたので、斎藤環さんの『引きこもり文化論』という本を読んだ。俺は新人類やオタクが生まれた頃の世代なのだが、この本の考察では、「現実を回避して物語に逃げ込む」のがオタク、「現実を物語として生きる」のが

新人類。まさに俺にピッタリ。あまりにも当を得ているので笑ってしまった。

俺は自分の人生を物語化しているとは、30歳の時についてカウンセラーの先生から言われた。確かに俺は毎日過去のことを反芻し、その過去と折り合いをつける物語を考えようとしている。

不登校だった頃のことは、今でも具体的には親しい友人にも話していない。辛酸を舐めるとはまさにあのことだった。

そして大学に合格して、京都に来て新しい物語を書き換えようと前向きになったのも束の間、大学にも溶け込むことはできなかった。今思えば、それまで何年も引きこもっていたブランクがあったのだから、最初から追いつくことは無理だったのだ。しかし、あの頃はベルトコンベヤーの時代、皆に並ばなくてはならないというプレッシャーのみがあった。

あの当時の俺は前向きになっていたから女性恐怖症なのに英文科を選び、しかも、不運なことに他のクラスよりもはるかに女子学生が多いクラスにふられることになってしまった。それでもあの頃の俺は頑張った。できる限り、女性に偏見をもたずに過ごそうと努力する日々だった。

しかし、これは引き寄せの法則なのだろうか。また女の子たちから陰口を言われ、困らされる日々。なぜ、俺はこれだけ女性から迫害される人生を歩み続けることになったのか。DVされやすい人、セクハラされやすい人、事故に遭いやすい人は確かに存在する。世の中には目に見えない力が存在しているのだ。俺は女性から迫害される運命を背負って生まれてきたのだと考えるしかない。

30代になって、男性運動に参加したが、これも俺には逆効果だった。俺は女性から受けたトラウマを分かち合いたくて、メンズリブに参加したが、そこで出会った人たちは、女性にわだかまっているのではなくて、女性を支援し、弁護する立場の人たちだった。したがって、普通の世界以上に女性を批判することは禁句である。俺は度重なるトラウマと無理解に遭遇する。

今更練り言を言っても仕方がない。当時の体験を反芻すればするほど、憎しみは募るだろう。

島崎藤村原作の映画化『破戒』を最近配信で見た。これは、被差別部落の話だが、映画の最初のところで、自分の過去を絶対に話してはならないと主人公が告げられる場面が出てくる。俺は不登校だった。このことは今だったら言えるが、30代くらいまではまだまだ人に話せない過去だったのである。俺は自分のアイデンティティを求め続ける人生だった。

『ある男』は今年の日本映画を代表するものの一つで、キネマ旬報のベストテンの2位に選出され、あちこちで賞も取っている。映画を見てからだいぶたっているのに、多少記憶が薄れているのだが、これは自分のアイデンティティについて考える映画である。

ある男が亡くなるのだが、その男は実際には名乗っていた男とは別人だということがわかる。それは彼が殺人者の息子で、それに気づかれないうちに、別人になりすましていたのだ。戸籍ロンダリングの話である。

一方、彼を捜査する弁護士も在日コリアンで、自分のアイデンティティ探しに迷っている人物であることがわかってくる。

俺もこれと似たような人生を歩んできた。

俺は人生の初期に不登校という重荷を負わされた。これが俺の人生に重い影を落としてきたのだ。

京都に出てきてから、新しいアイデンティティをつくろうと頑張ったのだけれど、これも何度も連載で書いてきた通り、大学生活は上手くいかなかった。

しかし、その後、非常勤で英語を教えるようになってから、徐々に自分の居場所は長い年月を経て、できていったようにも思える。

俺は29歳の頃から教え始めているので、もう教歴30年である。30年の間に俺は9つの大学と1つの専門学校で教えた。

最初の頃は、京都の大学1つと大阪の大学2つ。大阪は片道2時間半かかる場所もあったので大

変だったが、どうにか切り抜けた。その後京都の大学の仕事が徐々に増えて行き、専門学校で教えたり、大阪の他の大学で教えたりもしてきたが、結局、今は京都の5大学で勤務している。

非常勤の身なので、あれこれ言われて腹が立った時期もあったが、今はこの生活に満足している。映画の講義、専門科目、大学院の授業、卒論の口頭試問なども担当させていただいているので、それなりに力を認めてもらっているという実感はある。

俺は今の生活はそれなりに幸せなのだ。

何よりも、俺は若い教え子たちと楽しくやっている。2月は誕生月で春休みなので、何人もの元教え子がつきあってくれる。先生の役得である。

そのうちの1人は、俺と同じ大学だったのに途中から他のところに編入した子だ。俺はその子に会った時から、大学で上手いかわなくて他のところに移ったのか、俺と同じかと親しみを感じていた。

ところが会って話してみると、彼の場合は中学から付属校に入って、エスカレーター式に大学に入り、憧れる先生がいたから他大学に編入したのだそうだ。俺と違って、別に最初の大学と上手いかわなかったわけではないし、特別な愛着もないけど、確執もないらしい。

すごくいい子で、俺が驕ろうとしても、驕らせようとしなない。食事もデザートも自分で払う子だった。小学校から私立だったとのことで、生粋のお坊ちゃん好青年だった。

人生は星の数だけ。様々な人生が存在する。ところが80年代は規範の力があまりにも大きく、個を無視する時代だった。したがって、俺のような規範から外れた人間は容赦無く断罪されたのだ。

人間は恐ろしい。誰かを差別しなくては自分を支えられない生き物なのである。しかし、今俺は誰かを差別したり、人の不幸を喜んだりという自分からは少し脱却してきている。60近くになって、少しだけ自分の思い描いていた理想に近づいている。

もうすぐ59歳。起承転結でいえば、結の部分に

差し掛かってきている。俺の「起」は子供の頃周りから虐められ、不登校になったこと、「承」は京都に来たが、大学では上手いかわ悪戦苦闘したこと、「転」は40過ぎて、少しずつ京都に居場所ができてきたこと、そして、これから「結」。どういう結末が待っているのだろうか???

どうい結末が来たにしても、それが人生なのだ。せつないなあ。笑